

## 様式C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年4月2日現在

|  |
|--|
| 研究種目：基盤研究（A）   |
| 研究期間：2005～2008   |
| 課題番号：17203032  |
| 研究課題名（和文） 外国人集住地域における地域社会構造と地域住民生活の変容に関する総合的研究   |
| 研究課題名（英文） General Study on the Change of Local Community and Life in the Region Where Many Foreigners Live |
| 研究代表者<br>小内 透（ONAI TORU） 北海道大学・大学院教育学研究院・教授<br>研究者番号：80177253  |

### 研究成果の概要：

日本に住む日系ブラジル人は定住化しつつあるといわれるが、エスニック・コミュニティ、エスニック・メディアや母国政府によるブラジル人学校の認可等の政策展開によって、日系ブラジル人の定住化は、母国とのつながりを維持・強化する形で進んでおり、それが、日本人とブラジル人の希薄な社会関係を維持し、地域における様々なトラブルの一つの基盤になっていることが、日本の外国人集住地とブラジルの日系人集住地の調査によって明らかになった。

### 交付額

（金額単位：円）

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2005年度 | 8,600,000  | 2,580,000 | 11,180,000 |
| 2006年度 | 8,300,000  | 2,490,000 | 10,790,000 |
| 2007年度 | 8,100,000  | 2,430,000 | 10,530,000 |
| 2008年度 | 3,700,000  | 1,110,000 | 4,810,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 28,700,000 | 8,610,000 | 37,310,000 |

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会学

キーワード：ブラジル人、共生、外国人集住地

#### 1. 研究開始当初の背景

1990年の「出入国管理及び難民認定法」改正以降、15年の間に外国人労働者が大幅に増加した。なかでも、これまで少数しか在住していなかったブラジル人等のニューカマーの外国人が急増した。彼らの存在は地域社会に様々な影響や問題を生じさせた。そのため、多文化社会・多民族社会が避けられない日本社会の今後のあり方を地

域社会のレベルから考える上で有効な視座を獲得する必要がある。

#### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ブラジル人を中心にしたニューカマーの外国人が特定の地域に集住する傾向をふまえ、外国人が集住する地域の地域社会構造の変容と地域住民生活の変化および課題を多角的な視点から総合的

に明らかにすることにある。それは、主として労働力として受け入れが進められ急増したニューカマーの外国人が生活面でどのような問題を抱え、ホスト住民・ホスト社会にいかなる課題を突きつけているのかを浮き彫りにすることを意味している。

### 3. 研究の方法

本研究は3つの柱にもとづいて進められた。

第1の柱は、「外国人の増加と地域社会への影響に関するマクロ分析」である。ここでは、(1)各種官庁統計をもとにした外国人の国籍別地域分布の統計分析、(2)ブラジル人等のニューカマーが集住する「外国人集住都市会議」構成自治体等を対象にした、自治体独自の資料にもとづく外国人のより詳細な動向と外国人に対する行政施策の分析を行った。

第2の柱は、「特定の外国人集住地を対象にした実証的研究」で、代表的なニューカマー集住地、群馬県の東毛地域（太田市・大泉町）、静岡県浜松市および愛知県豊橋市の3地域を対象として、(1)外国人住民の労働・生活と意識の特質、(2)外国人住民の集住に伴うホスト社会の住民（日本人）の労働・生活と意識の変化、(3)地域行政システムの変化に焦点をすえたインテンシブな実証研究を行った。

第3の柱は、「トランスナショナルな生活世界の変容に関する実証的研究」である。少なからぬブラジル人がブラジルとのトランスナショナルな（＝国境をこえた）生活世界をもっているため、(1)ブラジル人の日本・ブラジル間のトランスナショナルな人口移動に関する動向、(2)ブラジル社会と在日ブラジル人とのネットワークの変容について、ブラジルにおける日本への主要送りだし地域での調査を行った。

### 4. 研究の成果

日系ブラジル人のデカセギ現象が始まって、すでに20年近くの年月が経つ。その間に、デカセギ現象にどんな変化が生じ、デカセギ現象はどのような結果をもたらしてきたのだろうか？

本研究では、この点を日本とブラジルの実態調査にもとづいて解明した。日本では、代表的なブラジル人集住地、群馬県太田市・大泉町、愛知県豊橋市、静岡県浜松市、ブラジルでは日系人の多い大都市・サンパウロ市、大都市近郊農村・スザノ市福博村、僻地農村・東アマゾン・トメアスーを対象にした。

以上の実証研究を通じて、まず指摘できることは、日本における日系ブラジル人の

定住化の進展とトランスナショナルな移動が共存するようになった点である。いいかえれば、定住化し一戸建てまで取得する階層が出現する一方、新規に来日する者や日本とブラジルを行き来するリピーター層も存在するようになったということである。

ブラジルでは、帰国後デカセギで得た資金をジュース工場の建設・運営にあて、農業の立て直しに成功した僻地農村・トメアスーがある一方、デカセギが地元の治安の悪化とあいまって農業の衰退をまねき日本での長期滞在化＝定住化の要因になる大都市近郊農村・スザノ市福博村があった。さらに、大都市を中心に帰国後デカセギで得た資金を元手に起業を試みるものの事業に失敗したり、長い期間日本で滞在したことによりブラジルの生活に適応できなかったりして、再デカセギにでる者がいた。このうち、大都市近郊農村で典型的に見られた現実が、日本での長期滞在化＝定住化層、大都市で典型的に見られた起業や事業の失敗、帰国後の不適応がリピーター層を生み出す背景となっていた。また、ブラジルでは、在学中あるいは学卒後ただちに日本にデカセギにでる日系人の若者が今でも存在し、新規来日層の主要な給源になっている。

日本では、新規来日層やリピーター層の存在は、定住化しつつある階層の生活世界をブラジルと強く結びつける役割を果たしている。ブラジルとの距離感を少なくし、ブラジルの新たな情報を提供してくれる。エスニック・コミュニティやエスニック・メディアの存在もブラジルとのつながりを維持する上で大きな機能をもっている。その上、ブラジル政府がブラジル人学校の認可や ENCCEJA（初等中等教育修了資格試験）の日本での実施などを通じて、デカセギ者を国民として維持しようとする政策を展開している。

その結果、日系ブラジル人は日本にいながらブラジル人としてのアイデンティティを維持・強化し、「遠隔地ナショナリズム」の担い手になりうる。日系ブラジル人の定住化は、母国とのつながりを維持・強化する形で進んでおり、「トランスナショナルな定住」とでもいうべき内実になっている。事実、日本滞在が10年以上に及ぶ層でも、送金を続けている者が少なくない。いずれ帰国するという意志を多くの者が持ち続けている。他方で、ホスト住民としての日本人はブラジル人の滞在が長期化しても、一戸建て層以外の者とは、あまり交流をしない状態が続き、日本人とブラジル人の希薄な社会関係が維持され、地域における様々なトラブルの基盤になる。

ただし、デカセギ者の子どもたちは、約

6割が日本の公立学校に通い、日本生まれの者も増加している。日本語が得意な者、日本語しかできない者、またブラジル人としてのアイデンティティが希薄になっている者が出現しつつある。「日本人化」しつつある子どもたちが現れている。ホスト社会やホスト住民の側も、大人のブラジル人に対する態度と彼らの子どもたちに対する眼差しは異なっている。大人との交流は、時間がたってもなかなか進まないが、子どもに対しては、日本人の子どもたちと違和感なく交流をするため、比較的優しい眼差しで見つめている。それを背景にして、学校教育を通じて、様々な支援を行うようになってきている。公立学校では、外国人の児童・生徒のための特別クラスを作り、教師の加配や日本語指導助手をおく自治体が一般化しつつある。さらに、公立の学校だけでなく、ブラジル人学校に対しても支援が進められ、いくつかのブラジル人学校が各種学校として認可されるようになってきている。

そのため、世代が進むことにより、「トランスナショナルな定住」から日本への「ナショナルな定住」へと変化する可能性もある。ただし、在日2代目層がどのような生活世界、アイデンティティを形成するののかは、日本社会が外国人としての彼らをどのように位置づけるののかに、大きく左右されることになるだろう。

多文化社会・多民族社会が避けられない日本社会の今後のあり方を考える上で、以上のような現実を踏まえる重要性が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

1. 野崎剛毅・品川ひろみ「日系ブラジル人保育の課題」『國學院短期大学紀要』26巻、2009年、103～115頁(査読無)

2. 小内透編著「日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住」『調査と社会理論・研究報告書』第28号、北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、2009年、1～343頁(執筆者：小内透・酒井恵真・小内純子他、執筆者総数：16名)(査読無)

3. 小内透編「地域生活における外国人と日本人の関係」『調査と社会理論・研究報告書』第27号、北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、2009年、1～104頁(執筆者：都築くるみ・浅川和幸・藤井史朗)(査読無)

4. 小内透編著「日系ブラジル人のデカ

セギと国家の対応」『調査と社会理論・研究報告書』第26号、北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、2008年、1～132頁(執筆者：小内透・アンジェロ・イシ・都築くるみ他、執筆者総数：8名)(査読無)

5. 小内透編著「外国人集住地域における日系ブラジル人の教育と保育」『調査と社会理論・研究報告書』第25号、北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室、2008年、1～244頁(執筆者：小内透・新藤慶・品川ひろみ他、執筆者総数：7名)(査読無)

6. 小内透「外国人の子どもの教育問題——過去・現在・未来」『ジュリスト』No.1350、2008年、38～44頁(査読無)

7. 小内透編著「日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の諸相」『調査と社会理論・研究報告書』第24号、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2007年、1～158頁(執筆者：小内透・小野寺理佳・野崎剛毅他、執筆者総数：5名)(査読無)

8. 小内透編著「日系ブラジル人の労働——生活世界と地域住民」『調査と社会理論・研究報告書』第23号、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2007年、1～137頁(執筆者：小内透・浅川和幸・小内純子他、執筆者総数：5名)(査読無)

9. 小内透編著「地域住民の外国人との交流・意識とその変化」『調査と社会理論・研究報告書』第22号、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2006年、1～98頁(執筆者：小内透・濱田国佑・菊地千夏)(査読無)

10. 小内透編著「日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界」『調査と社会理論・研究報告書』第21号、北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室、2006年、1～96頁(執筆者：小内透・飯田俊郎・アンジェロ・イシ他、執筆者総数：5名)(査読無)

[学会発表] (計8件)

1. 小内透「豊橋市における日系ブラジル人の子どもたちの現状と課題」コミュニティ政策学会第8回シンポジウム、2009.3.28、愛知県豊橋市役所

2. 新藤慶・菅原健太「公立小中学校におけるブラジル人と日本人の関係——集住地間の比較分析を通して——」第60回日本教育社会学会大会、2008.9.20、上越教育大学

3. 小内透「日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住」グローバルC O

E 社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開 第4回ワークショップ、2008.9.16、東北大学

4. 新藤慶「日系ブラジル人児童・生徒と日本人児童・生徒の交流の実態と意識」第17回備北人文科学学会学術集会、2007.7.31、新見公立短期大学

5. 飯田俊郎「外国人集住地域における日本人住民と外国人住民の交流」第55回北海道社会学会大会、2007.6.17、北海道武蔵女子短期大学

6. 小内透「外国人児童・生徒の教育問題」日韓生涯学習シンポジウム、2007.2.3、北海道大学

7. 品川ひろみ・野崎剛毅・小内透「日系ブラジル人保育の現状と課題」第58回日本教育社会学会大会、2006.9.22、大阪教育大学

8. 小内透「在日ブラジル人の教育問題」北海道大学・ハワイ大学ジョイントシンポジウム、2006.2.7、北海道大学

〔図書〕(計1件)

1. 小内透編著『教育の不平等』日本図書センター、2009年、367頁

〔その他〕(計4件)

1. 「日本でともに暮らす～学校に行かない子どもたち 学齢期の日系人」NHK教育テレビ・福祉ネットワーク 2007年10月23日放送(出演：小内透)

2. 「私も学びたい～外国人“不就学”の子どもたち」NHK総合テレビ・クローズアップ現代 2005年5月26日放送(出演：小内透)

3. 小内透「不就学の子どもたち」『助産雑誌』59(11)、2005年(コラム)

4. 小内透「ブラジル人」「ブラジル人児童・生徒」真田信治・庄司博史編『事典 日本の多言語社会』岩波書店、2005年(事典の項目)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小内透 (ONAI TORU)  
北海道大学・大学院教育学研究院・教授  
研究者番号：80177253

### (2) 研究分担者

李明玉 (LI MEIGYOKU)  
北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授  
研究者番号：00255374  
(2006年度まで)

### (3) 連携研究者

藤井史朗 (FUJII SHIRO)  
静岡大学・情報学部・教授

研究者番号：00145971

(2007年度まで研究分担者)

都築くるみ (TSUZUKI KURUMI)  
愛知学泉大学・コミュニティ政策学部・教授

研究者番号：30308796

(2007年度まで研究分担者)

結城恵 (YUKI MEGUMI)  
群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：50282405

(2007年度まで研究分担者)

酒井恵真 (SAKAI ESHIN)  
札幌学院大学・人文学部・教授

研究者番号：80073493

(2007年度まで研究分担者)

小内純子 (ONAI JUNKO)  
札幌学院大学・社会情報学部・教授

研究者番号：80202000

(2007年度まで研究分担者)

浅川和幸 (ASAKAWA KAZUYUKI)  
北海道大学・大学院教育学研究院・准教授

研究者番号：30250400

(2007年度まで研究分担者)

品川ひろみ (SHINAGAWA HIROMI)  
札幌国際大学・短期大学部・准教授

研究者番号：80389650

(2007年度まで研究分担者)

飯田俊郎 (IIDA TOSHIRO)  
札幌国際大学・現代社会学部・教授

研究者番号：60254736

(2007年度まで研究分担者)

アンジェロイシ (ANGELO ISHI)  
武蔵大学・社会学部・准教授

研究者番号：20386353

(2007年度まで研究分担者)

野崎剛毅 (NOZAKI YOSHIKI)

國學院短期大学・講師

研究者番号：50412911

(2007年度まで研究分担者)

小野寺理佳 (ONODERA RIKA)  
名寄市立大学・保健福祉学部・准教授

研究者番号：80185660

(2006年度から2007年度まで研究分担者)

新藤慶 (SHINDO KEI)  
新見公立短期大学・講師

研究者番号：80455047

(2007年度に研究分担者)